

成人期以降の友人関係の特徴に関する探索的検討

—新聞記事の内容分析—

Exploratory study of the characteristics of friendships after adulthood
—Content analysis of newspaper article—

本田 周二

大妻女子大学人間関係学部

Shuji Honda

Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University

2-7-1 Karakida, Tama-shi, Tokyo, 206-8540 Japan

キーワード：成人期，友人関係，内容分析

Key words : Adulthood, Friendship, Content analysis

抄録

人は、日々様々な対人関係の中で生活をしているが、友人関係はその中でも重要な対人関係の一つとして考えられている。このことは、心理学の分野に限らず、社会学や哲学、文化人類学など多様な領域において長い歴史の中で友人関係がテーマとして挙げられてきたことから理解することが可能であろう。友人関係といえば、同性友人関係を指すことが多く（和田, 1993）、様々な研究から同性の友人関係が個人にとって大きな支えになることが示されている（Bagwell et al., 2005）。しかし、友人関係の研究はほとんどが、児童期、青年期を対象に行われており、他の世代の友人関係に関するものは、一部、高齢者を対象にした研究（例えば、丹野(2010)）を除き、あまり見られない。これは研究において得られた知見の一般化可能性という観点からも改善していく必要性があるだろう。そこで、本研究では、成人期以降の友人関係の特徴について新聞記事（日経新聞の交遊抄）の内容分析により明らかにする。2018年1月1日（月）から2018年6月30日（土）までの間に掲載された151記事のうち、「喪友記」と呼ばれる別記事を除いた148記事を分析の対象とした。分析の結果、1）エピソードを挙げる友人の性別は同性が多いこと、2）同い年が多いけれど、年齢差のある人物についてもある程度選定していること、3）小さい頃だけでなく、社会人以降の出会いが多いこと、4）刺激を受け、学ぶことが多く、影響を与え合う相手としての友人が描かれていること、5）青年期の友人関係では見られない側面である、家族ぐるみの付き合いができる友人が描かれていること、6）Big Fiveの誠実性や外向性に対応する記述と考えられる、気さくで明るく、優しい真面目な友人が描かれていること、などが明らかとなった。あくまでも新聞記事であるという点で媒体独自の影響はあると考えられるが、本研究の結果は成人期以降の友人関係について検証する必要があることを示唆するものであると考えられる。

1. 問題と目的

人は、日々様々な対人関係の中で生活をしているが、友人関係はその中でも重要な対人関係の一つとして考えられている。このことは、心理学の分野に限らず、社会学や哲学、文化人類学など多様な領域において長い歴史の中で友人関係がテーマとして挙げられてきたことから理解すること

が可能であろう。友人関係といえば、同性友人関係を指すことが多く（和田, 1993）^[1]、様々な研究から同性の友人関係が個人にとって大きな支えになることが示されている（Bagwell et al., 2005）^[2]。本田（2009）^[3]は、日本における青年期の友人関係研究のレビューを行い、友人関係の特徴についてまとめている。それによると、青年期における

友人関係の特徴とは、個人の精神的健康を促進し（丹野, 2007）^[4]、情緒的な拠り所となる関係であり（柴橋, 2004）^[5]、友人と親密で深い関係を築くことが望ましいと考えられている。

しかし、友人関係の研究はほとんどが、児童期、青年期を対象に行われている。心理学関連の研究誌7誌（心理学研究, 社会心理学研究, パーソナリティ研究, 実験社会心理学研究, 教育心理学研究, 発達心理学研究, 青年心理学研究）を対象に、タイトルに「友人」を含むものについて検索したところ、2018年10月時点で、110件の論文が抽出された。そのうち、研究対象者別（のべ）に見ると、小学生（13件）、中学生（27件）、高校生（25件）、大学生（70件）、成人・その他（13件）であり、他の世代の友人関係に関するものは、一部、高齢者を対象にした研究（例えば、丹野(2010)^[6]）を除き、あまり見られない。これは研究において得られた知見の一般化可能性という観点からも改善していく必要があるだろう。本田（2018）^[7]は、20代～60代までの多世代（200名）を対象とし、世代間による友人関係の概念整理および特徴についてウェブ調査によって検討し、携帯電話に登録している友人数や学生時代から付き合い合っている友人の数は前成人期（23歳～34歳）が多いなど、世代間による違いを明らかにしている。このように児童期、青年期以外を対象とした友人関係研究を蓄積していくことは友人関係の機能などを明らかにしていく上で、重要であろう。そこで、本研究では、成人期以降の友人関係の特徴について新聞記事の内容分析により探索的に検討する。

2. 方法

分析対象記事：日本経済新聞の「交遊抄」を対象とした。「交遊抄」とは、平日の文化面に掲載中のコラムであり、各界の著名人（社長、学長、作家、議員、音楽家など）が、自分と親交のある人物との付き合いについて600字程度で紹介するものである。ほとんどの記事において、親交のある人物が1名紹介される。文字数がある程度統制されているという点で分析対象とするのにふさわしいと判断した。具体的には、2018年1月1日（月）から2018年6月30日（土）までの間に掲載された151記事のうち、「喪友記」と呼ばれる別記事（著名人が亡くなった際に、その方と親しかった人物が相手との思い出を語る記事）を除いた148

記事を分析の対象とした。

3. 結果と考察

記事に出てくる人物の特徴：148記事のうち、記事を執筆しているのは男性139名、女性9名であった。友人関係の研究では性差が見られることを踏まえると執筆者に性別の偏りがある点については解釈に注意が必要であろう。また、親交のある人物として紹介している相手の性別は、同性135名、異性13名であった。和田（1993）^[1]で指摘されているように、異性の友人関係よりも同性の友人関係が言及されることが多いようである。次に本人との関係性について見ると、年下24名、同い年48名、年上38名、不明38名であった。そして親交のある人物と出会った時期は、幼稚園1名、小学校4名、中学校8名、高校17名、大学22名、社会人91名、その他（不明、浪人時代など）6名であった。同年代で社会人以降に知り合った相手との関係について言及することが多いことがわかる。一方で年下や年上の相手も一定数挙げられており、同世代の友人関係が中心の児童期や青年期とは異なる付き合いの広がり成人期以降では見られるようになるのかもしれない。

記事の内容分析：“交遊抄”において、親交のある人物をどのように記述しているのかについて検証する。丹野・松井（2006）^[8]では、友人関係の機能として、相談・自己開示、相互理解、娯楽性、支援性、類似性、安心、尊敬・信頼、気楽さ、重要性、家族性、関係継続展望、情緒的結びつき、ライバル性に整理している。ここでは、これらのカテゴリーを参考に、“交遊抄”においても同様のカテゴリーが見出されるのかについて検討していく。はじめに、樋口の開発した計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を用い、出現頻度の高かった語について検討した。いくつもの語のうち、親交のある人物に対する記述を抽出するために「形容動詞」に着目した。分析の結果を表1に示す。多く出現したのは「大切」「必要」「大変」であった。記事の内容と照らし合わせると、相手の存在を「大切」「必要」だと考え、「大変」な時に手を差し伸べてくれた相手として描かれていた。他にも、「元氣」「気さく」「真面目」「率直」「冷静」など、相手の性格に関する記述がいくつも見られた。相手の性格に関する記述については、Big Fiveの誠実性や外向性に対応する記述であると考えられ、青

年期と同様に、成人期における友人関係においても、誠実性や外向性の高さが重要であることが明らかとなった。

表1 頻出語 (形容動詞)

抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数
大切	13	健康	7	安全	5	気さく	4
必要	12	好き	7	苦手	5	真面目	4
大変	11	不思議	7	重要	5	特別	4
自由	9	見事	6	丁寧	5	独特	4
新た	9	自然	6	豊か	5	非常	4
元気	8	多忙	6	面倒	5	普通	4
上手	8	熱心	6	様々	5	妙	4
						率直	4
						冷静	4

次にそれぞれの内容について友人関係の機能という観点で分類を行った。その結果、刺激 (例：〇〇さんの刺激を受け、私も伝統と挑戦をモットーにしている)、学び (例：情熱と行動が人を動かすことを私は若い彼から学んだ)、相談 (例：「大変な仕事だぞ、何でも相談に乗ってやるよ」と声をかけていただいた)、家族 (例：家族ぐるみの付き合いになり、互いの自宅で鍋を囲むこともあった)、尊敬・信頼 (そこで出会って以来、ずっと尊敬してきたエンジニアがいる)、影響 (例：帰国後約18年間、私が企業内での弁護士として勤めたのも彼の影響を受けたからかもしれない)、性格 (例：几帳面な彼とずぼらな私は性格も真逆なのだが、妙に馬が合った)、優しさ (例：腕っ節は強いが、ケンカを見ると止めに入る優しい男だった)、その他 (例：いつも元気で明るく、豪胆で引き出しも多い) という9つのカテゴリーが見出された。

以上の結果をまとめると、1) エピソードを挙げる友人の性別は同性が多いこと、2) 同い年が多いけれど、年齢差のある人物を選定していること、3) 小さい頃だけでなく、社会人以降の出会いが多いこと、4) 刺激を受け、学ぶことが多く、影響を与え合う相手としての友人が描かれていること、5) 青年期の友人関係では見られない側面である、家族ぐるみの付き合いができる友人が描かれていること、6) Big Fiveの誠実性や外向性に対応する記述と考えられる、気さくで明るく、優しい真面目な友人が描かれていること、などが明らかとなった。

あくまでも新聞記事であるという点で媒体独自の影響はあると考えられることや執筆者の性別に偏りが見られることなどいくつか問題点も見られ

るが、本研究の結果、友人イメージや概念が世代によって違う可能性が見出されたと言える。今後は、児童期～青年期に限定せずに多世代を対象とした友人関係の特徴を捉える研究の蓄積が求められるのではないだろうか。

引用文献

- [1] 和田実. 同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異. 社会心理学研究. 1993, 8(2), p.67-75.
- [2] Bagwell, L. C., et al. Friendship quality and perceived relationship changes predict psychosocial adjustment in early adulthood. *Journal of Social and Personal Relationships*. 2005, 22, 235-254.
- [3] 本田周二. 日本における友人関係研究の動向. 東洋大学21世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター研究年報. 2009, 6, p.73-80.
- [4] 丹野宏昭. 友人との接触別にみた大学生の友人関係機能. パーソナリティ研究. 2007, 16(1), p.110-113.
- [5] 柴橋祐子. 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因, 教育心理学研究. 2004, 52(1), p.12-23.
- [6] 丹野宏昭. 高齢者のQOLに果たす友人関係機能の検討. 対人社会心理学研究. 2010, 10, p.125-129.
- [7] 本田周二. 世代間比較による友人関係の特徴について. 人間生活文化研究. 2018, 28, p.126-130.
- [8] 丹野宏昭ほか. 大学生における友人関係機能の探索的検討, 筑波大学心理学研究, 2006, 32, p.21-30.

付記

本研究は、平成30年度大妻女子大学戦略的個人研究費の採択課題「成人期以降の友人関係の機能と適応との関連」(課題番号S3030)の助成を受けた研究成果の一部である。また、本研究の結果の一部は日本青年心理学会第26回大会(京都大学)にて報告している。

(受付日：2022年1月18日、受理日：2022年2月3日)

本田 周二 (ほんだ しゅうじ)

現職：大妻女子大学 人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻 准教授

東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程修了。

専門は社会心理学。現在は成人期以降の友人関係に関する心理学的研究と同時に、キャリア教育に関する研究を行っている。

主な著書：公認心理師必携テキスト（共著，学研メディカル秀潤社），メディカルスタッフのための基礎からわかる人間関係論（共著，南山堂），心理学大図鑑（監訳，ニュートンプレス）